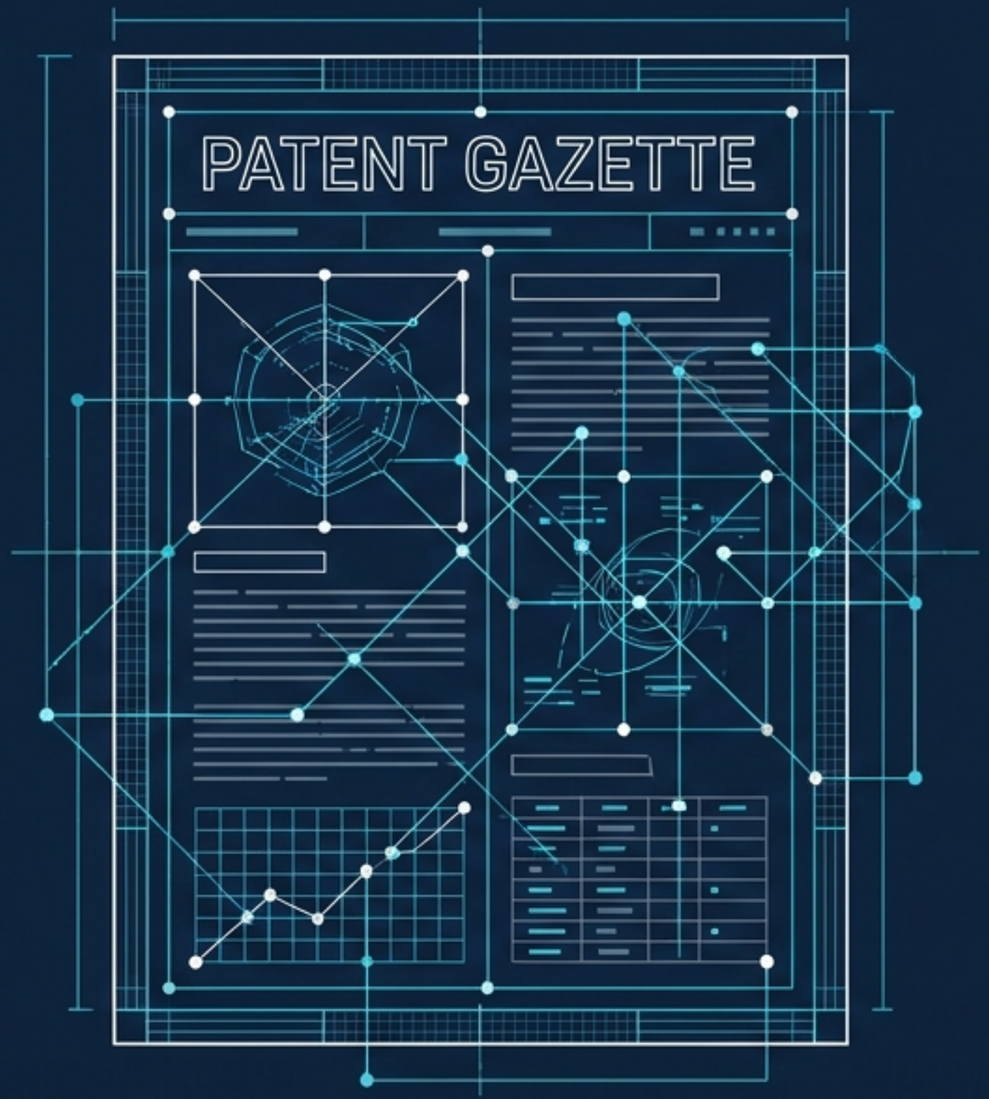


サマリアMCPとAgentが構築する知財実務の精密なる青写真

GPT-6.2 Astraを活用した特許調査と拒絶理由対応の再構築・導入検証プレイブック

レポート日付：2026年11月20日

Gemini Notebook

実務家が果たすべき役割は「作業」から「判断」へと移行した

［従来］反復作業

出願前の相談

発明メモの用語で検索し、近い公報を開いて発明者に聞き直す

拒絶理由の初読

通知書、引用例、補正履歴を開き、請求項単位で認定を転記する

継続調査

担当者の検索式と判断基準が別々に残り、毎月ノイズを読む

作業から
判断へのシフト

［新基準］AI時代の判断業務

出願前の相談

構造・機能・課題の別々の式を並行実行し、近い公報の段落と「発明者に聞くべき相違点」を同時に提示する

拒絶理由の初読

理由別の対比表をAIに作らせ、根拠未確認の行の優先査読と、事業上残したい範囲との照合に集中する

継続調査

対話で見つけた式を定期監視に登録し、除外理由と見逃し文献を保存・再点検する

Gemini Notebook

特許実務AIの実装軌跡と拡張されるデータソース

9月8日
外部AIと接続する「サマリアMCP」提供開始

10月
公開済みの日米出願の「包袋取得」機能が追加

11月10日
MCP利用者調査（17社）の公表

11月16日
サマリア本体で稼働する「Agent β版」提供開始

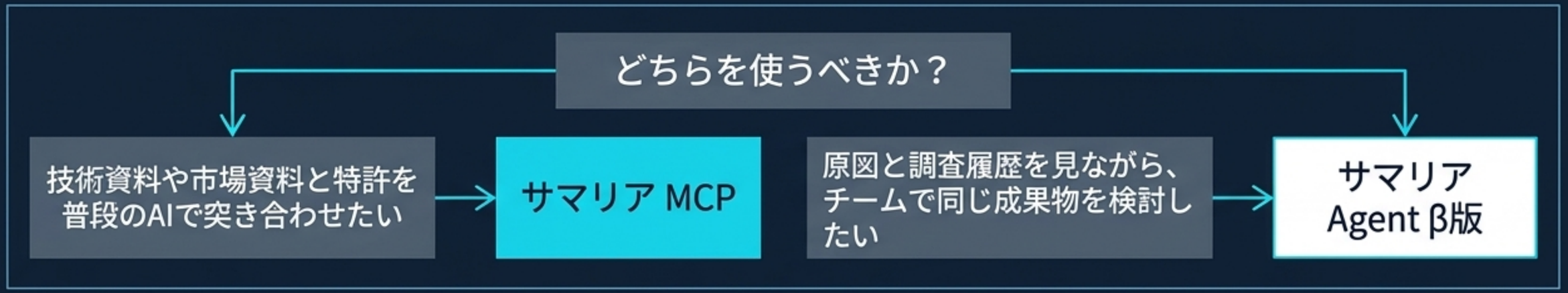


審査事例に裏付けられた10万件の類語辞書

MCP用の約1万件の辞書に加え、サマリア本体の辞書は特許庁の審査事例に基づく約10万件の類語を網羅。データソースの厚みが検索の質を担保する。

Gemini Notebook

検索の試行錯誤と基準の固定化でツールを使い分ける



比較項目	サマリア MCP	サマリア Agent β版
利用画面	Claude等の対応外部AIアプリ	サマリアAI画面
成果物	外部AIに依存、参照操作のみ	Word・Excel等に出力、版管理可能
利用枠	追加料金なし（外部AI枠は別）	追加料金なし（指示数を消費）

検索条件を変える間はMCP/Agentを使用。基準が固まり全件に適用する段階で、
サマリア本体の一括指示・定期監視へ引き継ぐ

Gemini Notebook

17社の利用実態と特許検索における現在地

実利用データ（17社調査）



満足度平均。週数回〜毎日の利用が大多数。

先行技術調査・障壁



導入の壁

「情報セキュリティ・情シス承認」と「指示の出し方」が最大の障壁。業務別プロンプト集へのニーズが顕著。

競技大会による精度検証



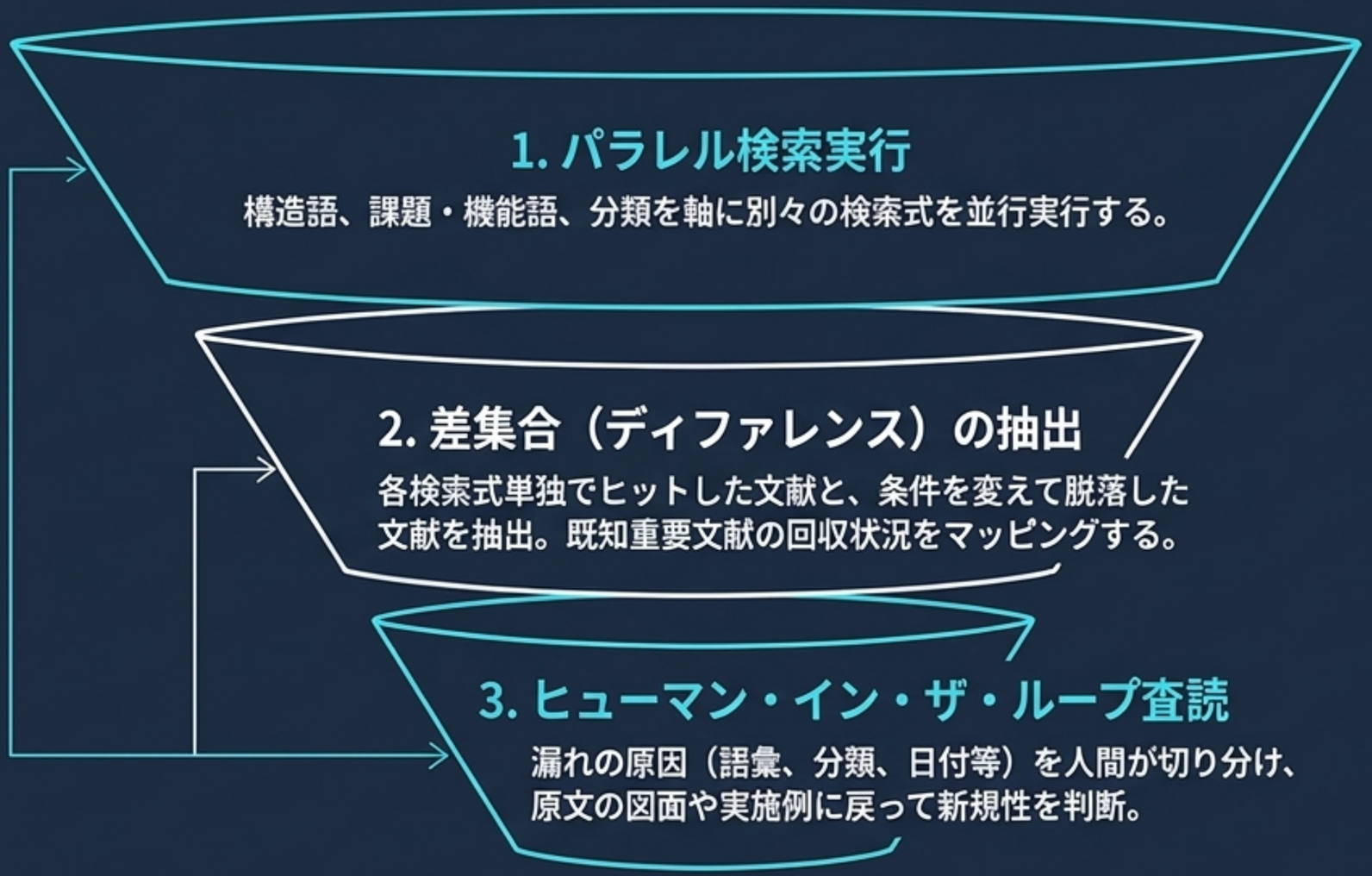
電気4件・機械8件・化学医薬14件の「既知正解」が、各分野の上位30件に全て含有（※3分野・計26件の条件付き結果）。

AIの限界と人間の役割

取得漏れや幻覚のリスクは残る。AIが示した査読時間7割削減の試算はあくまで指標であり、最終的な原文照合は人間が担う。

Gemini Notebook

先行技術調査における「差分」を通じた見逃し発見プロセス



実践事例

ドローンによる太陽光パネル点検

フレーズ指定を修正し「無人飛行体」を追加した結果、ヒット件数が変化。

14件 → 9件

旧式のみの文献を読むことで、検索式の不備と実際の調査漏れを明確に区別可能。

Gemini Notebook

拒絶理由通知対応における情報の完全分離と検証

審査官の認定 (Input)

条文・請求項・要件ごとに、審査官が指した箇所と引用文献を整理。

AIによる原文読解 (Analysis)

AIに原文を解釈させ、未解明事項を抽出。主引用発明との一致点・相違点、阻害要因を整理。

出願人の判断 (Output)

審査官の論理を最も強く説明した上で、それを弱める具体的記載を検討。
相違点の存在だけで結論を出さない。

実務上の注意点：API取得の限界

実際の特願（2020-095793等）の試行では、特許査定等は取得できたが当初請求項がAPIで取得できないケースがあった。欠落書類は人間が補い、根拠確認まで補正案は保留すること。

Gemini Notebook

進歩性検討の演習：AIが生成した反論ロジックの「採点」

ケーススタディ：特許庁 審査ハンドブック
事例7「タービン部材用ステンレス鋼」
(本願：S含有量0.01%以下 vs 主引用発明：S含有量0.1～0.2%)

変更の動機

Sを減らす動機（周知技術）

- 耐食性改善のための低S化は周知である(AIが単に「用途が違う」と出力したら却下)。



阻害要因

失われる機能

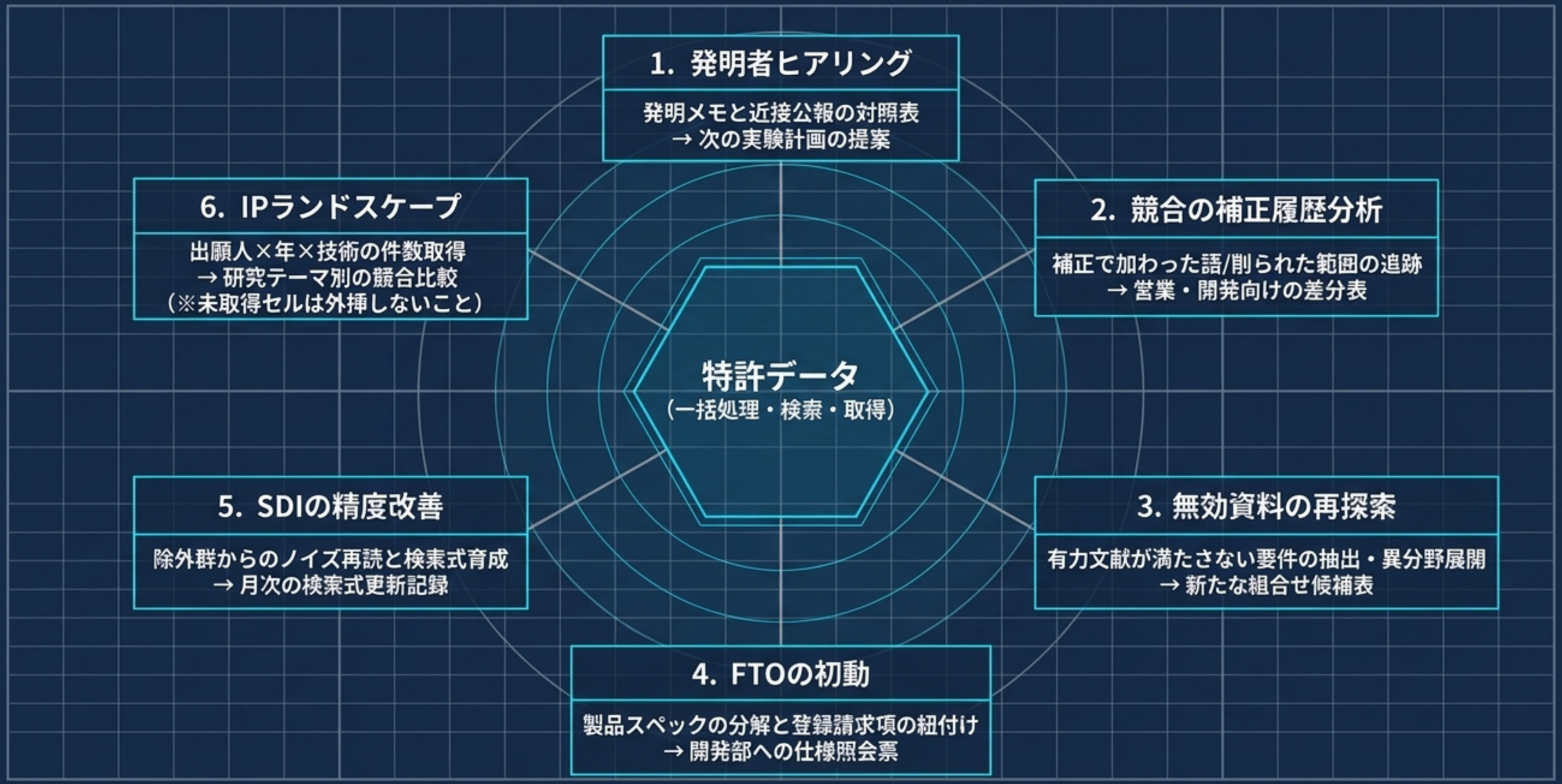
- 主引用発明はSによる硫化物形成で被削性を得ている。S不足は引用発明の目的を害する。

人間の採点基準

同じ結論の出力であっても「Sの範囲」「被削性への影響」「反対事情の考慮」のいずれかが抜けたAI案は不合格とし、再生成させること。

Gemini Notebook

知財ライフサイクル・レーダー：調査結果を事業判断へ直結させる



Gemini Notebook

The Prompt Vault：実務に直結する4つの標準指示文

1. 先行技術調査（漏れの発見）

「［発明メモ］について、［国・言語・基準日］で調査。構造語・機能語・分類で3つの式を実行し、既知文献［番号］がどこで落ちるかを示せ。」

2. 拒絶理由通知（認定表作成）

「［通知書・現行請求項・引用例］を使用。理由・対象・原文引用・AI解釈を別列にし、補正なし案と最小限定案について［守りたい製品仕様］への影響を比較せよ。」

3. FTO（開発部への照会）

「［製品・版］の［対象国］での権利を確認。独立項と従属項に製品資料を対応づけ、未開示の仕様は開発部への質問として抽出せよ。」

4. SDI（除外公報の点検）

「［旧式］と［新式］を比較し、旧式のみの文献から既知重件を査読せよ。除外理由と該当段落を示し、監視条件の変更案を提示せよ。」

Gemini Notebook

自社検証のための4週間導入プログラム（Implementation Gantt）

Week 1	Week 2	Week 3	Week 4

1. 過去案件の選定と基準構築

正解資料が揃っている過去の先行技術調査10件・拒絶対応10件を選定。技術分野と難度を記録する。

2. A/Bテストによる並行検証

従来手順と「AI併用手順」に別々の担当者を割り当て検証。既知正解や実際の応答は作業者からブラインド（隠匿）状態にする。

3. 第三者による原文ベースの採点

AIが生成した根拠と論理を、検証に参加していない 第三者が特許公報の原文と照合して採点する。

4. 手順の確立とプレイブック化

利用対象業務を確定し、自社専用のプロンプトと注意事項（API限界の補完など）をマニュアル化する。

Gemini Notebook

Measurement & KPIs：精度と工数を測る4つの指標

KPI 1：既知重要文献の回収率



拾えた重要文献数 ÷ 既知重要文献数

Insight: 漏れが「検索式の設計」と「順位付け」のどちらで起きたかを識別する。

KPI 2：根拠の正確さ



正しい主張を支える行数 ÷ 点検した全行数

Insight: 架空引用（幻覚）や別実施例の混同、要件脱落などのエラー種別を集計する。

KPI 3：通知への対応漏れ



正しく対応づけた理由と請求項の組数 ÷ 原文から確定した全組数

Insight: 重要指摘の見落としを含む工程は、AI導入後も必ず専門家が全件レビューする。

KPI 4：人間の総工数と費用（最重要）



検索設計・取得・原文照合・「修正」を含む担当者の中央値時間

Insight: 最初の下書きが速くても、「修正作業」で失った時間を可視化しなければ真の効果は測れない。

Gemini Notebook

セキュリティ・アーキテクチャ：情報の取り扱いとコンプライアンス



サマリア側の処理（完全ZDR）

MCPサーバー側はAWS東京リージョンで処理。検索クエリ等を一切保持しない「完全ZDR（Zero Data Retention）」対応。

接続経路ごとの注意点

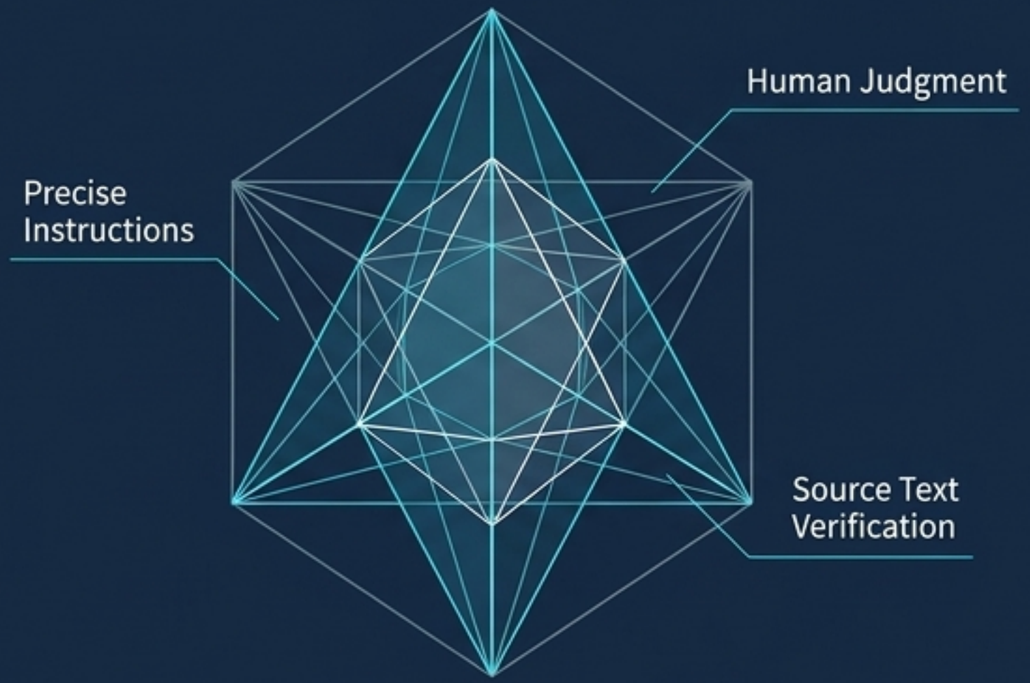
［MCP利用時］外部AI（Claude等）への保存・学習・権限設定は、自社が結んでいる各AIの契約環境に依存する。
［Agent利用時］サマリア本体は管理DBに入力情報を保存し、推論APIへ送信される場合がある。

未公開・機密情報の取り扱いルール

未公開発明や顧客案件を扱う際は、「許可された資料・接続経路」と「成果物の保存先・閲覧権限」を事前に必ず策定すること。対象国（中韓等の拡充期間）による取得範囲の差にも留意。

Gemini Notebook

The Final Blueprint：次世代の知財実務を牽引するために



特許実務AI（サマリアMCP/Agent）は、知財専門家の代替品ではありません。
それは、膨大な段取りと読解を超高速で処理する「最も強力なアナリスト」であり「壁打ち相手」です。

成功の絶対条件

1. AIの能力を引き出す「正確な指示と前提条件の定義」
2. 生成された結果を鵜呑みにせず、「特許公報の原文」に戻る徹底した姿勢
3. 「どこまで権利を主張すべきか」という、事業戦略に基づく「人間の最終判断」

ネクスト・アクション

自社の過去案件を1件選定し、本プレイブックの4週間検証プログラムを明日から開始してください。

Gemini Notebook